

令和5年度 山形県立農林大学校 学校運営評価(案)について

【運営方針1】教育カリキュラムの充実

※下線部は新規取組みまたは前年度から拡充した取組み

【評価基準】 A:大きく上回る B:上回る C:概ね達成 D:やや下回る E:下回る

【基本方向】農業新技術等を組み入れたカリキュラムの強化			取組状況	自己評価	次年度に向けた改善策
評価項目	評価目標	具体的方策			
1	農林大学校ならではの特徴的な教育計画の見直し・作成【新規】	① 農林大学校ならではの特徴的な教育計画の見直し・作成【新規】 新設される東北農林専門職大学(仮称)の附属校化を受け、「実践教育の充実」「地域社会のリーダー育成」等の農林大の役割や特徴を一層明確にした教育計画へのリニューアルを図る。また、同大学からの講師派遣等を通じて、教育水準の向上に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> 実践教育を強化するため、概ね以下の方向で教育計画の見直し作業を進めている。(主な変更点) <ul style="list-style-type: none"> ○卒業論文に関する時間数の増加(現行:288時間⇒見直し後:320時間) ○英会話に関する時間数の減少(現行:64時間⇒見直し後:32時間) 等 ○スマート農林業関係等で、専門職大学教員を講師に迎える予定 <p>*関係する条例や施行規則を見直し、年度末までに完成させる予定であることから、「C」評価とする。</p>	C	<ul style="list-style-type: none"> 専門職大学設置に伴う大幅な見直しは終了したことから、今後は実際に運用しながら、時代の変化等必要に応じて修正を図っていく。
2	先進技術等に対応したカリキュラムの充実	①スマート農林業に関する学習の充実【拡充】 農業部門では講義のなかで、アシストスーツ着用作業体験やドローンによる葉色診断に基づく可変追肥技術、ICTを活用したセンシングによる環境制御技術や高度な経営管理技術などを取り入れ、体系的にスマート農林業を学ぶ授業とする。また、実習のなかで、水稲ではドローン防除やスマート田植機(GPS)の活用、野菜ではICT育苗ハウス(遠隔モニタリング)の利用開始、果樹ではロボット草刈機実証を取り入れるなどの取組みを行う。 林業部門では、VRを用いた伐倒やかかり木の危険予測技術、レーザー計測やドローンを活用した森林管理などの知識と技術の習得に向けた講義を継続する。また、今年度から新たに、QGISによりレーザー計測データを用いた間伐など技術を講義に取り入れるとともに、卒業論文のなかで実践的な活用に取り組む なお、スマート農林業に関する講座のうち機械実演を伴う授業は公開授業として実施するとともに、農業高校にも情報を提供して、スマート農林業学習の機会を提供する。	<ul style="list-style-type: none"> 農機具メーカーの協力を得て、無人車操縦(5月)、ドローンによる模擬操作(8、9月)、アシストスーツ着用の実演と講義を実施した(9月)。 農業用マルチローター操作技術研修(5日間)を14名が受講し、全員がライセンスを取得した。 稲作経営学科では、昨年度ライセンス取得した学生(2学年)によるドローンによる農業散布実習を2回実施した。 果樹経営学科では、草刈りロボットの除草実演を実施した(11月)。 野菜経営学科では、アグリノートを導入し、タブレットにより農場管理を行う取り組みに着手した。 林業経営学科では、スマートフォンアプリによる測量やQGISへのデータの取込みについての実習や地上レーザーや航空レーザーを用いた間伐調査に関する卒論に取り組んだ。 公開講座は4回開催し、校外から19名の参加を得、そのうち3名が農業高校関係者だった。 <p>*農業高校等外部からも出席を得ながら、スマート農林業に関する講座を7回実施したほか、機械やシステムの実演に取り組んでいることから「B」評価とする。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> 専門職大学設置に伴い、スマート農業研究・研修センター等(新たな現場教室)が設置されたこともあり、導入された機材等を活用して実習の中にスマート農林業の技術をさらに取り入れていく。 スマート農林業Ⅱの授業について、専門職大学の講師陣による授業を公開で実施する。 産業用無人ヘリコプターの資格取得について、受講者数の減少などにより当校での実施は廃止とする。
	(2)農大チーズの販売回数:10回	①製品加工実習による農産加工技術の充実【拡充】 乳製品加工技術を習得するため、平成30年度に整備した乳製品加工施設を利用して加工技術に関する実習を行い、開発・製造したチーズ(ストリングスタイプ等)を県庁購買部や農大市場等にて販売する。 これまで製造に取り組んだチーズはフレッシュタイプのチーズが中心であったが、保存性の高い熟成タイプとして、昨年度の「チェダーチーズ」に引き続き、今年度は「ゴダーチーズ」の製法確立と、そのマニュアルづくりに取り組むことで、チーズ製造のノウハウの蓄積を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 乳製品加工施設を利用した加工技術に関する実習・製造を行い、ストリング、モッツアレラを合計17回販売した。(うち県庁3回、農大市場4回) 農産加工経営学科2年生の卒業研究関連でゴダーチーズの製造について取組み、農大市場、県農林水産祭等で計3回販売を行った。製法のマニュアル化も進みつつある <p>*チーズ全体で合計20回販売し、目標の10回を大きく上回ったことから「A」評価とする。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> 乳製品加工技術習得に向け、引き続き実習に取り組む、農大市場等を通じて販売を継続する。 6年度は新たにリコッタチーズの製造も検討する。
3	実践教育を重視したカリキュラムの充実	①先進農林業者等体験学習等の実施【継続】 農業者の下での実地体験を通じて、実践的な技術や優れた経営感覚を学ぶため、1年次に前期10日間、後期10日間の先進農林業者等体験学習を実施する。農業法人等への就職に向けたマッチングの機会ともなるよう、受入先については、学生の希望を聴取しながら、十分協議し、決定する。	<ul style="list-style-type: none"> 予定通り1学年の先進農林業者等体験学習を6月と9月に10日間ずつ実施した。現場における先進技術を学ぶ機会になる一方、体験学習先への就職を希望する学生にとってマッチングの機会となった。受入れ農家については、山形県地域営農法人協議会の協力を得て、受入先の拡大を図った。 <p>*受入農林業者等からのアンケート結果によいいて、5段階評価のうち高評価(上位1,2)は91.3%であり、目標の80%を上回っていることから、「B」評価とする。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> 同学習は、学生にとって現場での新技術を学ぶ場であり、自身の職業観醸成の場となっていることから、引き続き1学年の前期と後期において、それぞれ10日間の日程で継続する。
		②インターンシップの実施【継続】 法人就農及び就職希望の学生が、現場で実践的な技術や知識を学ぶため、農業法人や食品関連企業、森林組合等の理解と協力を得て、インターンシップを実施する。農業法人からの求人募集が遅い傾向にあることから、年度当初から農業法人に対して求人募集を働きかけるとともに、学生に対してはインターンシップに積極的に参加し、就職イメージを早期に醸成するよう指導する。	<ul style="list-style-type: none"> 雇用就農及び就職希望の学生が、農業法人や食品関連企業、森林組合等から理解と協力を得て、インターンシップを実施した。(計34回) インターンシップを実施することで、就職志望先に関して業務や職場環境等への理解を助長することで、そのままインターンシップ先への就職につながるケースが多かった。インターンシップ先の農業法人等からも、事前に互いのことを知ることができる良い機会と、概ね好評だった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 近年、雇用就農希望者が増加傾向にある中、インターンシップは企業側及び就職希望の学生双方にとって、マッチングの場として最適であることから、引き続き企業、森林組合等の理解と協力を得て、インターンシップを実施する。 特に農業法人については求人募集が遅い傾向にあることから、山形県地域営農法人協議会等の協力を得ながら求人募集を働きかけるとともに、学生に対してはインターンシップに積極的に参加し、就職イメージを早期に醸成するよう、指導していく。
4	先端技術に関する現地調査カリキュラムの充実	①最先端の研究や生産現場等での現地調査の実施【継続】 先端技術について学習するため、学科ごとに、先進的な実践、研究等に取り組む農業法人、企業、森林組合、研究機関等での現地調査を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> 各学科における現地調査の実施回数:144回 農業関係学科では、先進的な技術に取り組む農業法人、卸売市場、試験研究機関、食品製造業者、小売店等に出向き、経営に対する考え方、最新技術、最新情報、市場動向等を学んだ。 林業経営学科では、森林組合や木材関連企業等に出向き、実践的な技術習得、特にGPS機器を使用した実習やGISによる森林情報管理技術など、IT関連の最新技術について学んだ。 <p>*コロナ禍の状況が改善し、県外における現地調査を実施することができた。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> 農業関係学科においては、引き続き、次年度以降も現場における優良事例や最新の技術等を視察することで、次代を担う経営者としての感覚を養成する。 林業経営学科では、林業・木材関連企業等の協力を得て、最新技術等に関する知識の習得を引き続き支援する。
自己評価					自己評価
<ul style="list-style-type: none"> 来年度の教育計画について、卒業研究を重視した新たな教育計画に見直すことで、本校の実践教育の特徴を明確にすることができた。 スマート農業やチーズに関する取組みの充実を図っており、講義や販売の回数の増加に繋がっている。 先進農業者体験学習では、概ね高い評価をいただいた。インターンシップを有効に活用し、自身の進路決定に繋げるケースも多かった。 					B
学校関係者評価			学校関係者の意見・要望等→次年度の改善策等		評価
<ul style="list-style-type: none"> 最新のICT技術と実践教育カリキュラム等大変充実しており素晴らしい。 農業法人等を対象とした先進農業者等体験学習やインターンシップが、法人就職に向けたマッチングの機会となり、評価できる。 専門職大の附属校となることを契機にスキルアップと相乗効果を期待する。 農林大としての良さや楽しさを大切にしてほしい。生徒の元気が一番。 農業高校では、農林大学校と専門職大とのコンセプトの違いについて、理解が進んでいる。 			<ul style="list-style-type: none"> ドローン等、スマート農業機器については、操作だけでなく、実際の活用や費用対効果についての指導が必要である。 <ul style="list-style-type: none"> → スマート農業機器は高価である一方日々進歩していることから、経営的な視点から、農業経営への導入・活用を判断できる人材育成を進めていく。 英会話時間削減は残念。グリーンツーリズム等でインバウンド対応必要。 <ul style="list-style-type: none"> → 英会話については、内容の充実を図りながら効率的・効果的な授業となるよう見直しを進める。国際感覚に優れた担い手の育成については、東北農林専門職大学との連携の中でしっかり取り組んでいく。 		B